

金曜日。いつもだったら週末に向けての開放感で、そわそわと浮足立ってくる日のはずなのに、今朝は目が覚めたときからゆううつな気分だった。起きる直前に見た夢のせいもあるかもしれない。夢の中で、私は雄二君と二人で食卓を囲んでいた。何を食べていたのかは覚えていない。私は、正面に座る雄二君にずっと何かを話しかけているのに、雄二君はまるで防音ガラスの向こう側にいるみたいに無反応で、窓際に置いてあるテレビを見ながら、ご飯を食べている。私はそれにひどく焦った気持ちになって、とりあえずテレビを消さなくちゃとリモコンを探しているところ目覚めた。起きると手にはスマートフォンを握りしめて、目覚ましのアラーム音をオフにしていた。そんな夢から始まった一日は、とにかく散々な一日だった。

朝、いつもは鏡を見なくても吸い付くように装着できるソフトコンタクトが、どうしても入らなくて、開けたばかりのZweekのレンズをゴミ箱に捨てる羽目になった。気分を上げるために、買ったばかりの靴を履いたら、朝の通勤だけで靴擦れをした。昼前、午後の会議で使う資料を印刷しようとして、グラフだけがなぜか出力されなくて、結局昼休み返上で、手書きでグラフを書く羽目になった。夜、仕事帰りにいつものコンビニで梅おにぎりを買おうと思ったら売り切れていて、仕方なく鮭おにぎりで妥協してレジを済ませたところに、納品の車がコンビニの駐車場に入ってくるのが見えた。

こんなの、呪われているとしか思えない。いつもの十倍ぐらい疲弊して、電気の付いていない暗い家に帰り着いた私は、通勤カバンとコンビニの袋をダイニングテーブルに置いて、お風呂に直行した。

バスマットの上で下着以外の服を乱暴に脱ぎ捨てて、その上に時計とピアスを置いて、スマートフォンだけ握りしめて、浴室のドアを開けた。浴槽の蛇口を全開にすると、お湯の勢いで眼鏡が蒸気でくもった。スマートフォンは、百均で買ったビニルケースに入れてお風呂の縁に立てかけた。

もうすぐ五月になるのに、夜の気温はせいぜい一〇度くらいしかなくて、ほとんど裸の私は、震えながらたまるのを待った。十センチぐらいまでたまったところで、待ちきれずに下着を脱いで湯船につかった。お湯はちょうど膝を抱えると太もものところまでしかなかった。腕の内側の柔らかいところに、鳥肌が立って、私はお湯をすくって腕をなでた。

浴槽の中で背中を丸める。お湯のかさがお腹あたりまで増えてきて、私はやっと足を伸ばすため息をついた。

そのとき、ブブツと軽い振動音がして、私は慌てて浴槽のふちに置いていたスマートフォンを手を取ったけれど、どうでもいいアプリのポップアップだった。手に取ったついでに Spotify の、登録しているマイリストを起動させた。

お気に入りの音楽を聴いて、お風呂にゆっくり浸かっていると少しずつ体がほぐれて、それと連動するみたいに心の固く尖っていた部分が少しずつ柔らかくなってくるのが分かった。社会人になって五年も経つと、自分を甘やかしたり機嫌を取ったりするタイミングや方法なんかも分かかって来る。

私は、充分、温まってから湯船から上がって、ロクシタンの試供品の小袋入りのボディソープを開けた。この前、母の日のプレゼント用にとハンドクリームを買ったときにももらったものだ。大事に取っておいたものだけど、自分をとことん甘やかしたい今日こそ使うときだ。封を切るとハーブ系のいい匂いがした。体を洗いながら、一人決意する。

今日は、昨日の夜からほったらかしている洗い物も三日分ぐらいたまった洗濯物も上司からだめだしをくらった資料の見直しも、全部放り投げて Kindle で買いためている漫画を読む日にしよう、そうしよう。髪の毛をシャンプーで泡立てながら、いつのまにか音楽に合わせて鼻歌を歌っていた。

そうだ、漫画片手に、アイスを食べるのもいいな。確かハーゲンダッツがあつたはず、頭の中で思い浮かべたところで、私は思わず顔をしかめた。虫歯のある歯で思わずせむべいを噛んでしまったような不意打ちの痛みだった。

なんとか核心に触れないように、騙し騙し過ごしてきたのに、やっぱりダメだった。熱いお風呂もお気に入りの音楽も、一時的に痛みを和らげる効果はあっても、完治まではさせてくれない。その痛みで容赦なく存在を主張してくる。私はのろのろともう一度バスタブの中に戻ってずるずるとお湯の中に沈んだ。できることなら、もっと深いところまで沈んでいきたかった。

厄介なところは、と私は思う。『虫歯』が自分ではままだらないところだ。見たくもない夢を見せたりして、せっかくの金曜日を朝から邪悪なものにしてしまう。今日あつた一つ一つのツイてない出来事だって、何もなければここまでダメージを食らうことはなかったはずだ。けれど、『虫歯』で神経が削られている今は小さな傷が致命傷になってしま

う。

一週間以上前に作ったスパイスカレー、それが一緒に暮らしている雄二君との喧嘩の原因だった。ハーゲンダッツは、カレーの後にアイスを食べるのが好きな彼のために買っておいしたものだ。だけどあいつはアイスもカレーも食わずに出て行って、それっきり帰ってこない。連絡だってない。私の気持ちなんてきつと考えもしないから、そんなことが出来るのだ。その日から冷蔵庫のカレーは私にとつて『虫歯』になってしまった。そしてそれは、ハーゲンダッツが入っている冷凍室のすぐ上、チルド室に今も眠っている。

雄二君は、大学のサークルで一緒だった一つ年上の恋人だ。付き合ってから一年ちょっと、一緒に住みだしてからは半年くらいになる。

雄二君との初めてのデートは、サイゼリヤだった。雄二君とはサークルのグループでは何度も遊んだことはあったけど、二人で会うのはその日が初めてだった。

本当は、口コミでそれなりに有名で、ミシュランの一つ星だって取ったことのある創作イタリアンのお店を雄二君は予約してくれていたのだけど、それを不意にってしまったのは、私のミスで仕事の段取りが大幅に遅れて予約時間に間に合わなくなってしまったからだ。

私は、半分泣きながら、雄二君が待つサイゼリヤへ向かった。髪はぼさぼさで、化粧はほとんどとれかかっていたと思う。雄二君は店の奥の四人掛けのソファ席で、十四インチくらいの小さなPCに覆いかぶさるようにして座っていた。テーブルにはデキャンタに入った白ワインとポテトフライとソーセージグリの盛り合わせが置かれていた。時間はとつくに二十二時を過ぎていたと思う。

ごめんなさい、と謝ろうとした瞬間、雄二君は、

「ちょっと見てくれる？ いま、数日ばかりで編集していた動画がやっとできたところ。アメリカとイギリスで似たようなネタもあるんだけど、ちょっとしたテイストが違うんだよね」と私にPCの画面を見せながら言った。

覗き込むと、恰幅のいい外人がプールに勢いよく頭から落ちるところだった。それは、雄二君が最近ハマっているという海外のドッキリ番組のワンシーンだった。彼は各国のおんなじような番組からお気に入りシーンを拾ってきて、翻訳と文字入れをして三十分の動画集にまとめたのだそうだ。完成まで六時間ぐらいかかったらしい。

「日本のファミレスはほとんどWi-Fi環境整ってるし、ワインは安いしうまいし、作業するのに最高だよ。周囲のざわついた感じがちょうどよくて、すごい集中できた」と雄二君は笑った。雄二君が本当に楽しそうに、そして得意げに笑うので、動画の内容はちっとも頭に入ってこなかったけれど私も思わず笑ってしまった。そして、この人と私はこの先もずっと一緒にいることになるかなどか直感したのだった。それから私たちは、リブステーキとドリアとイカサラダとマルゲリータと追加のワインを注文して、終電の時間までくだらない話をしながら一緒に過ごした。

雄二君が住んでいたアパートの更新時期が来た時に、実家住まいだった私が家を出て、二人でマンションを借りることになった時も、何も心配なんかしていなかった。実家一度も出たことがなくて、家事もほとんどしたことがない私を母親は心配して、あれこれ言っただけで、楽天的な私はそれを聞き流していた。でも一緒に住んで数カ月経つと、やっぱり他人同士、価値観が合わないことだ出てくる。

私はそれを新しい雄二君を発見できたと思って楽しむようにしていた。でももちろん、楽しめないこともあって、我慢できるところは飲み込んだり、飲み込めないところは婉曲に伝えたりしてなんとか乗り越えてきた、と思っていた。

私たちは、フルタイムで働いていて、毎月の残業時間が大体八〇時間をぎりぎり超えるか超えないかだったし、雄二君は社内や社外の付き合いで、飲みに行くことが多い職種だったから、平日の夜は別々に夕食をとることが多かった。それでも、二人とも比較的早く帰れる日はあって、そんなときは、あらかじめ担当を決めて、どちらかが二人分の夕食を用意することになっていた。負担にならないように、惣菜を買ってきてもいいし、簡単なものを作ってもいいという緩いルールだ。先週の水曜日そんな日で、私が食事を用意する番だった。

私は料理をするのが好きじゃない。特に味付けが苦手だ。レシピ通りに作ればいいのに、大きじや小さじを無視して目分量にしてしまうから、いつも味がぼやけたりしょっぱ過ぎたりする。だから、どちらかという私が担当のときは、惣菜を買ってくることの方が多かった。ちょっといいデリを買う方が作るよりおいしいし、二人分だけなら結局は安上がりだと思っっているからだ。

むしろ雄二君の方が、冷蔵庫のあまりものなんかを上手に使って料理を作ってくれる。卵とネギとしらすしか入っていないのに、びっくりするくらい美味しいチャーハンを作ってくれたこともあった。

そんな私でも作るのが好きな料理がある。ネギをたっぷり入れたお好み焼きとレンコン入りの鶏つくね、それからカレーだ。

先週の水曜日、気持ちに余裕があった私は、久しぶりに何か作ることにして駅前のスーパーに寄った。何を作ろうか、店内を一周しながら、ずいぶん前から冷凍している鶏もも肉と熟れすぎたトマトを思い出して、チキンカレーを作ることに決めた。玉ねぎとココナッツミルクをかごに入れて、それからもう一度店内を一周して、ハーゲンダッツのチョコバーを二つかごに入れた。

家に帰ってさっそくカレーに取り掛かる。作るのは市販のルーを使うやつではなくて、スパイスカレーだ。何気なくyoutubeを見ていたら、スパイスを組み合わせて作るスパイスカレーの動画に行きついて、一度試しに作ってみたら、びっくりするくらい美味しく作れた。それから、スパイスカレーにはまってしまい、最近の私のカレーは、そればかりだ。雄二君もいつも美味しい美味しいと食べてくれている。

作り方は、とてもシンプルだ。まずはニンニクとショウガ、玉ねぎをみじん切りにする。無になりたいときは、みじん切りを思いっきり細かくしてもいい。それからカットしたトマトを入れて炒めてから、いくつかのスパイスを入れて、固まり状になるまで水分を飛ばす。基本の工程はただこれだけ。それから、自分の好きな具材を入れて、ヨーグルトやココナッツミルクを入れてカレーを延ばしていけば完成だ。必要なスパイスはターメリックにクミンとコリアンダー、ガラムマサラにチリペッパー。スパイスの配合によって、カレーの味はいつもちよつとずつ違う。少しずつ作り方を変えて、自分好みのカレーを作るのは実験みたいで楽しかった。

味見をすると今日のカレーもなかなかの出来だった。スパイスの香りが部屋中を漂う中、雄二君は帰ってきた。

おかえりー、とキッチンから声をかけたときから、今日はそっとしておいた方がいい日だなというのを見当がついた。ビジネス用のバックバックをリビングの床に置くときの雑な仕事とか「ただいま」の音がほとんど聞こえなかったこととか、部屋着に着替えた後、いつもならすぐにじゃれついてくるのに、ソファの前で突っ立ったままテレビ番組をザッピングしている様子だとかでそれは察せられた。

サラダとビールとビールグラスをテーブルに並べてから、今日はカレーだよーとなにも気づいていないような能天気な調子で声をかけた。食卓に着くのを待って、カレーをよそくと、雄二君が軽くはあとため息をつくのが聞こえた。

それから、

「またこれかよ。俺は普通のカレーが食べたい。ルーで作る日本のやつ」と言った。

まさかそこから、一週間以上尾を引く大喧嘩に発展するなんて、私をベットみたいに甘やかすのが上手な雄二君にだって想像できなかったに違いない。とりあえず、私は自分が雄二君によそったカレーをシンクにぶちまけて、その上、雄二君が同棲記念にセレクトショップでペアで買ってくれたビールグラスを割るなんて、全く予想もしてなかった。

グラスが床に落ちた音は高く鋭い音がしたはずなのに、水の中で聞くみたいに、それほどか現実感がないぼんやりとした音のように聞こえた。

雄二君は気付いたら部屋のどこにもいなかった。私がのろのろと床に落ちたガラスの破片を拾っているとスマートフォンが震えて、今日はホテルに泊まるというそっけないラインが送られてきた。それから、その次の日も同じようなラインが送られて来た。私は、それに既読スルーした。そして、その次の日、距離が欲しいというラインが送られてきた。

私はその時になってやっと慌てて、長文の返信を一時以上かけて書いて、けれど送信する直前に、思いとどまった。ものすごく重い、うつうつとした内容だったからだ。私は、結局分かったとだけ書いて返した。それから、一週間経っても、雄二君からはラインも電話もない。

その日から、私はお風呂にもトイレにもスマートフォンを持ち込むようになった。

次の休日、大学からの友達をカフェに呼び出して、経緯を話しながら、経緯といってもほとんどなかったけれど、カフェで号泣した。友達は、だまって聞いてくれて、私に紅茶のお替わりを入れてくれた。

私はお風呂から出ると、買って来たフランクフルトと鮭のおにぎりをキッチンで立ったまま食べた。それから冷凍庫のハーゲンダッツを手にとろうとして、仕方なくその上段にあるチルド室の引き出しに手をかけた。引き出しは重かった。

チルド室には黒い鉄製のココット鍋がずっしりと収まっていた。その鍋は何年前か前に、友達の結婚式の引き出物でもらったものだ。重たい蓋を取ると、茶色い油膜に覆われたものが現れた。一週間と二日前に私が作ったスパイスカレーだ。

それを見ると、あのとときの喧嘩をリアルに思い出してしまって、私は、もう一度蓋をして、冷蔵庫の扉を閉めて、お風呂に飛び込みたいという欲求がむくむくと沸き起こって来たけれど、結局、鍋をコンロの上に置いて火にかけた。さつさと食べるか捨てるかすればよかったのに、向き合うのが怖くて、今日まで来てしまった。

お玉でかき混ぜながら、匂いを嗅ぐ。特に変なおいはいはしない。いつものスパイスの、食欲をそそるいい匂いがした。

私はお玉のままおそるおそる一口すくって、口に入れた。それから、こういう雑なところが雄二君が我慢ならなかったところなんだなと思いついた。

タオルをしわくちゃなまま干すところ、引き出しから爪切りを出して片付けないところ、鼻をかんだティッシュをテーブルに置いてしまうところ。あのひどい喧嘩のときに、投げつけられた言葉の一つ一つを振り返ると、あときは逆上してしまっただけけれど、冷静になった今は素直に反省する気持ちが一割くらいにはなった。

私だって、つい抑えられずに怒鳴ってしまった。気に入って着ていたオーバーサイズのロンハーマンのロンティが雄二君の部屋着になってたこと、お使いを頼んだ卵が十個入り二百円じゃなくて、六個で二百八十円もする高級卵だったこと、子供のころから気に入っていたうさぎの形をしたお弁当箱をいつの間にか捨てられていたこと。そんなことを泣きながらわめていたら、いつの間にかお皿をひっくり返して、グラスを割ってしまったのだ。最後に見た雄二君は心底、白けた顔をしていた。

今日、温めなおしたカレーは二食分ぐらいあったけど、私は意地になって全部さらえてしまった。カレーは熱くて辛くて、食べているうちにじんわりと額に汗が浮かんだ。梅おにぎりとフルーツを食べた後で、お腹は減っていなかったけれど、冷蔵庫から明日の朝用を買っておいたロールパンを一つ出してきて、最後にお皿に少しだけ残ったカレーをすくって食べた。カレーはやっぱりおいしかった。私は、満足のため息をはきだした。カレーを食べただけなのに、単純だけれど、何か区切りがつけられたような気がした。

一筋鼻水が垂れて、ティッシュで鼻をかんで、ゴミ捨てにすてた。どんな状況だって、カレーは美味しい。いわくつきのカレーだって、私は一人で美味しく完食することができ。私は、自分が思っているより強いかもしれない。

カレーを食べ終えた翌々日、雄二君の妹に連絡して、雄二君を彼の実家近くの公園に呼び出してもらうようお願いした。

ホテルに長期滞在なんてお金も着替えもなくなるだろうし、雄二君は実家にいるのに違いないと思ったからだ。しかも雄二君は十歳の離れた妹を溺愛していて、きつと妹からのことづてなら、聞いてくれるように思った。雄二君の妹は私に「〇〇」のスタンプを返してくれて、「最近のお兄ちゃんは、寝ていると思ったら、突然夜中に外に走りに行ったり、朝早くから部屋の中で縄跳びしたりしてうるさいです」「この前私が塾から帰ったら、リビングの床で歯ブラシをくわえたまま倒れていました」「ママもうつとうしいの

で、はやく自分ちに帰って欲しいと私に愚痴っています。よろ」とラインのメッセージを連投して雄二君の最近の様子を教えてくれた。

約束の時間より少し早めに公園に着くと、日曜日だというのに、誰もいなかった。今どきの子どもは、滑り台とブランコしかない公園なんか見向きもしないのかもしれない。

誰からも存在を忘れられたさみしい公園に一人でいると、急に不安な気持ちになってきた。どういう結果になってもまずは話し合わなくちゃと思っていたのに、嫌な想像ばかりしてしまう。私は一つしかないブランコに座った。

椅子の部分が低すぎて、小さく漕ぐと、蹴りだしたつま先が、地面について、すぐ止まってしまった。今度はもう少し大きく、漕いだ。私はブランコをゆっくりと漕ぎ始めた。

雄二君が来たら、なんて言おう。まずは、謝る？ でも、雄二君は、私が三割しか悪いと思っていないことにきつと気付くだろう。大体人が作ったものにたいして、文句を言う方がどうかしている。しかも食べてもいないのに。でも、そういえば、その前にカレーを作った時も、日本のカレーの話になったような。あれ？ どうして、そんな話になったんだっけ……。

私は、さらにブランコを漕ぐ。雄二君は来てくれるのだろうか？ もし来てくれなかったら、こっちから会いに行こうか。でも、今日雄二君が会いに来てくれなかったなら、もうどうやったって声が届かないのかもしれない。この前見た、夢みたい……。

私はもつともつととブランコを漕ぐ。

ブランコは大きく振れて、視界一面が空でいっぱいになる。大きな声を出したいと思っただけけど、さすがにそれはやめておいた。

いい歳をした女が、一人で休日の昼間にブランコを漕いでいる姿は、客観的に見れば職業案件かもしれないと頭の片隅で思ったけど、もう仕方がない。なるようになれ！ だ。

たかこ、と呼ぶ声が聞こえた気がして、公園の入口を振り返ると雄二君がいつの間にかしょげいなげに立っていた。私は、わ、と一声叫んで、慌てて、かかとを地面について止めようとしたけど、勢いが付きすぎてブランコから落ちそうになった。今度は、少し慌てた声が近付いてきて、ブランコのチェーンを持って、ブランコを止めてくれた。

一週間と四日ぶりの雄二君は、やっぱり私のお気に入りのロンハーマンのロンティを着ていて、それから「相変わらず元気そうだな」とおでこにしわを寄せて仕方なさそうに笑った。

私も同じように仕方ないな、という風に頑張って肩をすくめてみせたけど、でも我慢できずにブランコから飛び降りて、雄二君を力いっぱいハグした。雄二君は一瞬よろめいて、でも私の背中を抱きとめてくれた。言いたいことはいっぱいあって、でも一つも言葉にならなかつた。雄二君は、しばらくそのままできてくれたけど、どっかからカレーの匂いがするといつて、私の頭の上でくんくんと鼻をならした。

そして、「あー、なんかカレー食べたくなってきた、この前食べ損ねたから」と無神経に言うのだった。